

一枚の写真

信 楽 慧



ようやく緊急事態宣言があけて、日常が少しずつ戻ってきています。早く元の生活にもどりたいものです。今回は私が感銘をうけた、「仏法と鉄砲」のお話をします。

高光大船というお東のお坊さんが「門徒の家

安楽寺寺報

閑光

第101号 報恩講号

発行所
〒737-0054
吳市上山町2-28
安楽寺
TEL: 0823-21-7561

の街へ映画でも観にいこうと思っていたら、朝からお父ちゃんとお母ちゃんが報恩講様から参ってくれ、としつこく頼むものだからしかたなしに居るだけや。」と云うのです。

そこで高光先生は、「厄日でも何でもよい。よう参ってくれた。ところで、めったにお前さんに会うことが無い。どうじゃ。何か仏様のことについて聞いてくれんか?」と言われました。そうしたら、「うちの親は朝から晩までうるさいや。仏法聞いてくれ。と、やかましい。あの仏法というのはなんじゃ。一口で仏法が何か教えてくれ」と言ったのです。

それについて高光先生は、「仏法は鉄砲の反対じゃ。鉄砲は、生きとるもんをストンと殺すのが鉄砲じゃら? 仏法はなあ、死んだものを生き返すのが仏法じゃ」と言われました。

「死んでる人間生き返すのか? 棺桶の中の人間が生き返るのが仏法か? どんなのを死んだと言うのや。」と「門徒の長男が聞く」と、高光先生は「死んでる人間というのは案外多いのやぞ。お前さんのような人間を死んでる人間と言った。わかるか。」と言われました。

「例えば、あの機関車というのは毎日石炭を食べて、レールの上を行ったり来たりしているが、あれは生きとるんか?」と高光先生が聞く、「あれは機械や。蒸気機関車は生きとらへん。」と答えました。

すると、高光先生は「お前も朝、昼、晩にご飯を食べて毎日同じようなことをして、休みの日には昼まで寝て、映画でも見に行こうと言ってる様な生き方をしている

お前は、蒸気機関車とどこが違うか教えてくれ。同じじゃら。お前も動いてるけど生きとらへん。そういう人間を死んでる人間と言っのや。その死んでるお前のような人間を生き返らせてくれるのが仏法や。解かったか。」と言われました。

皆さんは「このお話をどう受けとめられますか。」

私は、「このお話を聞いた時に、こちらの一枚の写真を撮った時のことを思い出しました。この写真は、富士山に登山した時に撮影したものです。この時午前0時から登山を始めたのですが、富士山では「何の音もしません」でした。その静寂に包まれたとき、初めて日常生活で「どれだけの音に気づかず生きてきたのか」に気づかされました。

つまり、私は「このお話に出てくる蒸気機関車と同じでした。蒸気機関車の自動操縦しながら毎日を生きてしまっていた私にとって、この生き方から抜け出し、本当の意味で生きるためには、日々の生活で「気づき」を得ると言うことがとても大切なことだと気づきました。

仏教は気づきの宗教です。小さな気づき一つ一つが仏法に出会わせてもらっているという「こと」を意識して生きていこうと思いました。

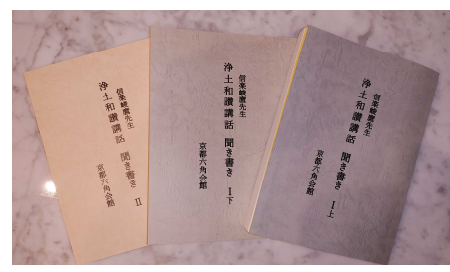


浄土和讃講話(聞き書き) 発刊しました!!

安楽寺マンガ通信

その51 信楽めぐみ作

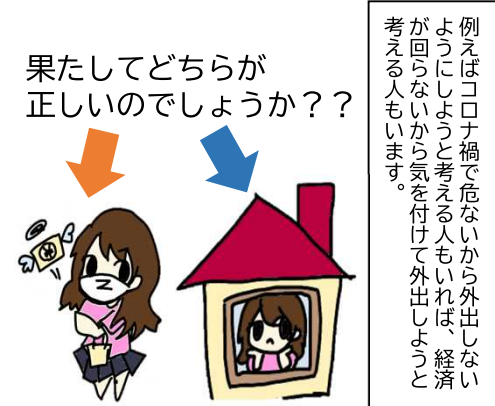
前住職の浄土和讃講話が書籍となり発刊されました。この中身は前住職が生前、京都の六角会館で浄土和讃(親鸞聖人のうた)についてお話したもので、十四年間、七十五回にわたるお話の内容です。その録音テープを姫路の御同行黒田美和子さんが文字にされ、そして自ら自費出版をして、三冊の本にまとめられました。「親鸞さまのまことのお心を伝えてくださった信楽先生のお言葉を、一人でも多くの方にお伝えできるよう」と一心にこの大事業を完遂されたことです。話し言葉そのまま、生前の前住職の講義を思い出します。九月二十六日の信楽峻齋前住職七回忌法要時にお参りの皆様にはお配りさせていただきましたが、もう少し残部があります。もしお読みいただける方がいらっしゃいましたら、安楽寺までご連絡ください。お分けいたします。



今回の閑光では、「気づくこと」の大切さを学びました。

私は、今まで何も考えず、生きながら死んでいました。1面のように自動的に日々を過ごしていました。そして、2面の大阪の男性のように生き方を模索して、仏教に出会った方の素晴らしい生き方とは違ひ、産まれた時から仏教に会わせていただいていたにも関わらず、人間として生きていかなかったのです。今号でそのことに気づかせてもらいました。

しかし、人間とは、急いでしまふ生き物です。今、気づかせてもらっても、月日が経つにつれてまた、死んだように生きてしまうのです。そうならないためにも、年4回ではあります。が、閑光を読んで、愚かな自分に気づかせてもらい、良い機会をもちつつ生きていきたくと思います。(めぐみ)



人生をふり返る時

信楽 晃仁

先日、このようなお話にであいました。こは地獄の閻魔王庁である。閻魔王は「浄璃の鏡」を見ながら男にこういった。

「なんだ、お前は。悪いことばかりして、ちつとも良いことをしていないではないか。これじゃあ、地獄行きだな」

「すみません。急だったもので、善行を積む暇がなかったんです」

「急に死んだというが、お前は何歳じゃ？」

「六七歳です」

「六七歳か。六七歳なら、わしが送った七人の使者を見たであろう」

「七人の使者といいますが・・・そんな方は見かけませんでした」

閻魔王はこういった。

「一つ目は目だ。かつてはどんなものでもはつきりと見えた。しかし、最近ではどうだ・・・よく見えない」

二つ目は耳だ。昔はささやき声でも聞き取れたというのに、この頃は角笛さえも聞こえない

三つ目は歯だ。若い頃は石さえかみ砕けていたが、今ほとんど残っていないではないか

四つ目は髪だ。子どもの頃はカラスのように真っ黒だった髪の毛も、すっかり抜けて禿げ上がり、わずかに残る髪も白く変わってしまっただろうが

五つ目は背骨だ。若い頃はナツメヤシの木のようにピンと張っていた背骨も今では弓のように曲がってしまったではないか

その男性は「日々の生活に追われてしまつてなかなか、そうはいかないが。この先生の言われる通りに生きてみたいと思いました。」と

前住職の本に出遇つて、安楽寺を尋ねてこられた方が数名おられます。それほど心に響く話が、前住職の書籍にはあるにもかかわらず、さて私はどうかと考えてみま

すと、なかなかそのことがわかつているとはいえないこととです。本気で聴聞しなければ、地獄行きはまぬがれません。私のところにもつくれば七人の使者が来てお

歩むべき道を記した書物も揃っています。全ての準備は整っています。後は私がいづ本気になるかです

林住期、あるいは遊行期に入った皆さん、いまこそわが人生をふり返り、仏法を学ぶ時です。御法座はその場を提供してくれま

す。またそれがお寺の役割だと思つてお

うと

す

す

六つ目は足だ。かつては二本の足でしっかり踏ん張っていたが、今や足もとおぼつかない。杖がなくて、ふらついてしまつて歩けないだろうが

七つ目は食欲だ。昔は口にするものすべてがうまかつたのに、この頃は、どんなものも口に合うまい

さあ、七人の使者を説明したぞ。何か言うことがあるかね？みんな、お前とともにいるではないか

男は何も言えなかった

「使者の警告を無視して、お前はどの準備もしなかった。いまさら後悔してももう遅い。お前は地獄行きだ」

※浄璃（じようはり）の鏡は閻魔王がいる庁舎にあり、使者の生前の善悪の行為を映し出すという鏡

考えてみれば、鏡のお話の通り、私のところにも七人の使者が来ています。このお話は人ごとではありませ

ん。自らの生き方を振り返る時はとつづくに

来ていま

す

す



お念佛のしずく

仏になるべき身となる...



真宗では、仏法を聴聞し、信心にめぐめてゆくことを、お育てにあらずかと言います。この「育」という文字は、去と月の二つの字が組み合わされたものだといわれます。そしてこの去とはもととも子という字をあらわし、月とは「肉」という字をあらわしているとい

七回忌
釋峻磨 (俗名：信楽峻磨)
清誠院釋唯信 (俗名：西王地唯信) 三十三回忌
浄徳院釋尼妙香 (俗名：柳父サハノ) 三十三回忌

10月30日、右記三名のご法事をお勤めいたしました。

信楽峻磨前住職、西王地唯信は前々住職、柳父サハノはその後、母親であり、昭和十三年に前々住職が往生後、一人で三人の子どもを育てながら、安楽寺を守ってきた坊主です。

こうした寺族と、その時その時の門徒の皆様が一緒に、今後の安楽寺のご支援も、よろしくお願

い申し上げます。



安楽寺法要案内

--報恩講法要--

日時 11月20日(土)朝席・昼席
朝席10:00～ 昼席13:00～
講師 岐阜 願誓寺 松橋 哲成 先生
講題 信楽峻磨先生の教えの要
※今回はお斎がありません。昼食が必要な方は各自でご用意下さい。

--御正忌報恩講--

日時 1月22日(土)
講師 自勤
・参詣にはマスク着用でお参り下さい
・手指消毒、三密回避等感染予防にご協力下さい。
・発熱、咳等風邪症状や体調不良の方は参詣をお控えください。
新型コロナウイルスの感染状況により、急遽変更する場合がありますことご了承下さい。
会場は基本的には、安楽寺と致しますが、これも参拝者の人数や感染状況により、変更する場合があります。